

# 鮮やかな世界へ

山黒

4月19日(日)22:00時 シガトシユキ 大学生

---

【自宅にて】

-俺に、とって人生は意味があるものなのだろうか-

俺は、地元の高校に通い、それなりに勉強して、都内の大学に進学した。  
大学で、やりたいことがあったわけじゃない。  
俺は、学生でいる間は、難しいことを考えなくても済む。  
そんな適当な理由で、大学に通うことを選んだ。

大学に行くのなら、どんな大学に行くかは、  
自身で決めたかった。俺が、初めて自分の未来について  
考えたのが、大学受験だったように思う。  
それまでは、何もしなくても、大人がレールを敷いてくれていたからだ。

今、俺が通っている大学は、俺の中で、いわゆる「第一志望」の大学だ。  
知名度、立地条件など、俺にとってこれ以上ない。  
そう思っている。4年間経った今でもだ。  
今の大学は気に入っている。ただ、最近俺はよく、  
大学に来る必要があったのか、と考えるようになった。  
当時、なんとなくで選んだ事を後悔しているのかもしれない。

この国では、高校教育まで、無償で受けられ、それが義務となっている。  
その期間で、頑張った奴と、そうでない奴が分けられる。  
馬鹿な奴も、賢い奴も、普通の奴も、皆、18歳までは、  
学生でいることが出来るわけだ。  
18まで学生をしたくない奴は、進学予定の高校に、  
申請をすることで、通学免除となるが、(高校を辞める事はできない)  
審査が厳しく、学生以上に、学べる場を  
自分で持つてる奴らしか、まず通らない。

俺の友人にも「免除組」がいたが、  
そいつは、将来海外で仕事がしたいとって、  
国を出て学ぶことを選んだ、なんとも立派な奴だ。  
また、長期の義務教育に耐え切れず、通学しなくなる奴も、  
少しながらいたように思う。  
そんな中、俺は、ほとんどの奴らと同じく、  
地元の高校に進み、義務教育を受け、  
大学受験をしたわけだ。

俺は正直、大学に行く事で、何かを得たいと思っている訳じゃなかった。  
もっと言えば、高校へ行く意味も特に考えていなかった。  
周りの奴らに合わせて、真面目な学生を演じていただけだ。  
自分自身のことなのに、どこか客観的になっている。  
俺だけじゃなく、周りの奴らもそうだ。

与えられた幸せになんの違和感も感じずに、のうのうと暮らしている。  
その中に辛いこと、耐え難いことがあるろうとも、それを享受している。  
もちろん、立派な思想を持つ奴、行動を起こせる奴もいるだろう。  
だが、ほとんどの奴らは、同じような人間だ。  
性格の違いは、あるだろうが、考えてることは、大して変わらないと、俺は思う。  
こんなことを語っている俺も、他の奴らと同じ、コピーみたいな人間だろう。

この国は昔、中学教育までが義務化されていたと聞く。  
早いうちから、自分のことを考える機会が、与えられているわけだ。  
例え、俺たちのように高校へ通うことになったとしても、  
自身で考えて結論を出した意味は非常に大きいだろう。

12年の長い義務教育は、俺たちを押し付け、自由を奪った。  
初めて人生について真剣に考えるのは、皆、17~18才くらいだ。  
俺たちは、昔の若者と違い、進路を決断する時間が短くなっている。  
それでも、俺たちは焦ることがない。  
「何も決まっていないから、大学へ進学し、やりたい事を探す。」  
そんな事をいいながら、受験勉強をする。  
そして大学へ行き、楽しく過ごす。俺もそうだ。  
だが結局、何も考えず、もう4年目、最終学年だ。  
楽しく生活するだけで、何も学ぶ気になれないし、  
実際、何かを得た気もしない。  
今まで俺は、何をしてきたのだろう。

俺は、大学で普及されたPCを叩いた。

『俺たち若者は、生活の場を大人から与えられ、それを受け入れる。  
大人がいなければ、何もする事ができない。  
俺たち若者は、生きているんじゃない、生かされているんだ。』

俺は、利用しているSNSにそう書き込み、PCを閉じベットに伏した。

【学校】

「先生、須田くんは、どうして学校に来ないんですか」

私は生徒から質問を受けた。

残念ながら、彼が学校に登校しない理由は、私には分からず、

彼のことを調査する時間もない。電話をかけても通じない。

先ほども、彼の自宅に電話したが、結局通じなかった。

「体調を崩している、と連絡を受けているぞ。お見舞いについてやったらどうだ」

そんな連絡は来ていないが、目の前の生徒が、彼の情報を持ち帰ってくれればと思った。

自分自身で、彼の家に訪問できないことが、もどかしい。

生徒は、一瞬顔を曇らせたが、そうします、と言い残し、教室を出て行った。

「はあ」

私はため息をついて、生徒の姿を見送ると、職員室のデスクへ向かった。

「あら、後藤先生。随分お疲れのようですね。お茶、入れましょうか」

職員室に入ると、同学年を受け持つ教師に声をかけられた。

彼女は、私より、二回り程若い、古典の教師だ。

折角気を使ってくれてるのだからと思い、私は「お願いします」といい、

自分のデスクに腰をかけた。

窓際のデスクからは、綺麗に並んだ桜の木が見える。

入学式からは、もう二週間余り経ち、桜の花びらは、

ほとんどが散ってしまっている。

咲いている間は、注目されるが、散ってしまうと、

誰も、見向きもしなくなる。

「あの花びらを掃除するのが、大変なんだろうな」

私はポツリとこぼし、出席簿に目をやった。

学校に登校しなくなった須田は、先日入学したばかりだ。

桜が咲く頃に、中学生になり、散る頃には登校拒否だ。

いじめでもあったのか。中学生という年齢はいじめが起こりやすい。最近、携帯電話のメールや、インターネットのサイトでのいじめが主流になっているらしく、教員側から見えづらい。しかし入学直後は、比較的そういう問題は起こりづらいはずだ。皆、クラスに溶け込み、友人を作ろうとするから、この時点で、生徒間の問題は発生しづらい。私にもいじめがある、という話は届いていない。彼の家庭で何か起こったのか。家庭問題だとしたら、厄介だ。学校側から、登校を促すのが難しくなる。どうしたものか。

「後藤先生、お待たせしました、お茶どうぞ」

ありがとうございます、といい茶を受け取る。茶を啜り、また、ため息をつく。登校拒否、か。私が学生の頃もいた。しかし、4月から来なくなる生徒はいなかったはずだ。

他のクラスはどうだろうか。3月、4月と仕事が忙しかったから、ほとんど話をしていない。同じ学年を持つ彼女に相談するのもいいだろう、と思い、声をかけた。

「白井先生、少しお話してもよろしいですか」  
「あ、はい。結構ですよ」

私は、彼女に、登校拒否者が自分のクラスから出たこと、理由が分からず、忙しくて調査する事も出来ず、もどかしい思いをしている事などを話した。彼女は、私の話真剣に耳を傾けてくれた。

「私のクラスからは、登校拒否者は出ていませんね。他のクラスからも、その話は伺っていませんよ」

彼女は更に、

「後藤先生のクラスから、登校拒否者が出てしまったのは、後藤先生のせいでは、ないです。先生が気を病むことはないですよ。」

と伝えてくれた。

「正直、私も自分に原因があって、生徒が登校しなくなったとは思っていないんだ。

しかし、出てしまった以上、その生徒が学校に来るように促さなければならぬだろう。長く、教鞭を振るってきて登校拒否する学生も見てきたが、未だに、理解できないんだ」

---

そうだ。私には分からない。学校に通える事は、素晴らしい権利だ。友人と一緒に努力し、高めあうことが出来る環境を提供してくれる。しかも、私が学生の頃とは違い、高等教育までが、義務教育となり、無料で通学する事が可能となっている。自身が学生時代、アルバイトをして、公立高校に通っていたことを思えば、今の学生は幸せなのではないかと思う。だが、近年、登校拒否児は増加傾向にある。全国の中、高学生のうち、7%が、登校拒否しているという話もある。100人のうち、7人が、通学していないということか。しかも、登校拒否の定義が曖昧で、実際には更に増えるといわれている。

なぜ、若者は学校から去っていくのか。  
私は、白井先生に礼をいい、煙草に火をつけた。

4月20日(月)13:00 スダタカユキ 中学生

---

【自宅にて】

僕が、中学校に入学したのは、今月の頭。  
それから、2週間ほど経った、月曜日の昼、  
僕は自宅のPCの前にいる。  
僕は、いつもどおり、【学校行ってない奴集まれ！】  
という掲示板の動きを追いながらすごしていた。

別に、体調が悪いわけでもないし、学校で嫌なことがあるわけでもない。  
でも、僕は、最初の3日間だけ学校に行き、それ以降学校へ登校していない。  
始めのうちは、学校へ欠席の連絡をしていたが、最近はそれもしない。  
学校から、電話がくることがあるけど、一度も取っていない。

父さん、母さん、は気付いているのだろうか。  
父さんも、母さんも、僕より早く起きて仕事へ行き、  
僕より遅く家に帰ってくる。連絡が来るまで気付かないだろう。

僕はまだ、そこまで長く学校を休んでいるわけじゃないから、  
ばれても怒られないかもしれない。むしろ、「頑張って学校にいこう。」  
とか言われるんだろうな。

僕は今年で13歳。この先、義務教育が5年間も続くのか。  
「義務」であるのに、それを拒んでも、別に罰される事はない。  
悪いことしてるのに、罰を受ける必要がない、っていうのが面白い。  
やばいな、学校行かないのが、癖になりそうだ。

ふとPCを見ると、気になる書き込みを目にした。

『お前ら、何で学校行かないのか晒そうぜ。』

なんで、僕は学校へ行かないのか。  
3日間中学校へ行って、楽しいこともあったし、勉強も新鮮だった。  
嫌な場所じゃないんだ。でも、実際こうして休んでいる。  
どうしてだろう。  
何も分からないや。

ピンポン！ピンポーン！

チャイムが鳴った。

誰が来たのかは分からないため、一応確認に行こうか。  
勧誘とかだったら、面倒だな、と思いつつ、  
僕は、ゆっくりと玄関に向かい、ドアを開いた一

目の前に立っていたのは、小学校から仲が良い、女子だった。

「おっす。体調悪いつて聞いたから、とりあえずポカリ買ってきたよ」

「体調が悪い？別にどこも悪くないけど。誰から聞いたの？」

どうやら、体調不良で、休んでいることに、なってるらしい。  
学校の皆に、体が弱いと思われているのかな。

「後藤先生から、聞いた。体調悪いから休む、って連絡が来たって。  
てっきり、風邪引いてると思ってたんだけど。それでお見舞いに来たんだけど。  
ポカリ買って来た意味ないじゃん。」

「いや、その・・・ごめん。お金返すから」

「要らないよ。それより何で学校来ないの？」

分からないんだよ。それが。休むのが癖になっているだけかも知れない。

「・・・」

何も答えることが出来ない。うまく言葉が出てこない。

もう、明日から学校に行こう。  
そのうち、先生とか、クラスの皆とかが来てしまいそうだ。  
そうしたら、学校に行きづらくなってしまう。  
でも、明日起きたら、また休みたくなるかも知れない・・・

「おい！答えろよ！何で来ないんだよっ！皆、心配してるんだぞ！私も・・・」

彼女の表情が悲しげに見えた。

そうか、ごめん。

休むことが、そんなに悪いことだと思っていなかったよ。

僕は決めた。明日から絶対に学校に行こう。

まだ、入学してから一ヶ月経っていない。

馴染みのないクラスメイトは、風邪で休んでいると思っているはず。

今ならまだ間に合う。

「ごめん。明日から学校に行くよ。学校行かなかった理由は、いいかな？」

彼女の表情は少し明るくなった。

「明日から来るなら、理由は教えてくれなくてもいいよ。」

彼女は優しくなった。そして、何より友人思いだった。  
きっと、学校に来ないのが僕じゃなくて、他の人でも、  
こうして、家に来ると思う。

もう休めないな。

「ありがとう。絶対に行くよ。」

僕は笑顔で答えた。  
明日、友達にも謝らなくちゃな。

「じゃあ、明日の八時十分、タカン家に迎えに行くから！それまでに準備しといてね。・・・また明日！」

彼女、瀬戸舞香は、そう言い残し去っていった。  
ありがとう。  
学校行かない理由が見つからないなら、  
学校行く理由を見つけなきゃ駄目だよな。

僕は、明日一緒に学校に登校する事が、  
急に、恥ずかしくなってきた。

4月20日(月)18:00 シガトシユキ 大学生

---

【自宅にて】

「腹減ってきたな」

今日は、母さんが遅いから、自分で、食事をどうにかしなければならない。

「いつも通り、コンビニで済ませればいいのか」

俺はさっさと外出用の服に着替え、家を出た。

4月、もう春とはいえ、この時間になると、やや肌寒くなる。

街行く人を見ても、まだ、半袖一枚のチャレンジャーはいないようだ。

あたりもだいぶ暗くなり、夜が訪れようとしていた。

俺は、早く買物を済ませ帰宅したいと思い、歩幅を広くした。

近くのコンビニにやってくると、案の定、客がほとんどいなかった。

人があまり通らず、近くのマンションのために出来たようなコンビニだ。

なのにも関わらず、マンションの住民が余り利用してくれないと、

仲良くなったパートのおばさんが嘆いていた。

どの客がマンション住民だか、おばさんには分かるのだろうか。

今度あったら聞いてみるのもいいかもしれない。

俺は、毎週楽しみにしている雑誌を立ち読みしてから、

いつもと同じ弁当(450円のから揚げ弁当だ)を購入して、帰路についた。

数十分しか経っていないのにも関わらず、外気は

更に冷たくなり、俺は、薄着で家を出たことを後悔した。

バチッ

部屋の電気を点け、PCの電源を入れ、電子レンジに弁当を突っ込んだ。

無駄が無く、何度も繰り返した動きだ。俺の生活は、最近パターン化している。

学校の単位を全て取り終え、学校へ通う必要がなくなったことが原因だろう。

アルバイト以外で、家から出ることがほとんどなくなってしまった。

就職活動も、3月で終わっているため、軽く、引きこもりと化している。

就職活動は、なんとなく説明会を受けた会社を気に入り、

選考を受け、縁があったようで、採用となった。

別に、他の会社でも俺はよかったし、

その会社にこだわる理由は得には無い。

ただ、一番最初に俺を欲しいを入れてくれたのが、その会社だけだ。

結果、俺は就職活動を早めに終わらせ、学生らしくない生活を送っている。  
正直できることなら、今年から働きたい気持ちがあった。  
俺が学校で得られるメリットはもう何も無いだろう。  
俺の場合、卒論があるわけでもないし、サークルに参加しているわけでもない。  
群れるのが嫌いで、高校からの付き合いがある友人としかつるまない。

大学の顔見知りと言わせると、俺は贅沢な奴らしい。  
就職活動も終わっていて、単位も取得済み、卒論もなし。  
何もすることがないのだ。確かに、遊ぶにはもってこいの環境だろう。  
毎日が夏休みとっていい状況だ。しかし、俺は元々そんなに遊ぶのが  
好きなわけではなく、友人宅、自宅で少量の酒を飲みながらのんびりするの好きな人間だ。  
休みなんて、週に2回で十分足りている。だったら会社で働きたいという気持ち強い。  
俺には、膨大な時間を上手く利用する事が、できそうにない。  
残りの学生時代で、やりたいことが見つからない。  
遊びたいと言っている奴らの方が、俺よりよほど目的を持って生きているじゃないか。  
そんな気がしてならない。

俺は温まったから揚げ弁当をほお張り、PCからインターネットを起動した。  
俺のPCの「お気に入り」には、他人には良く分からないサイトが並んでいる。  
先日友人が俺のPCをいじったとき、「お前、疲れてるのか。」と心配された。  
そのように見えるサイトが並んでいる。  
最近ハマっているのが、ネット上の友人達と、リアルタイムで会話ができるものだ。  
メールとは違い、全員の発言が見えるのがありがたくて利用している。

そういえば、昨日の俺の書き込みに対して反応があったらろうか。  
俺は、残っているからあげに、付属のマヨネーズをかけた。

『シガ>プロフィール拝見しました。大学生の方なんですね。私は、中学校で教師を  
している者です。シガさんは、いつ頃から、そのような考えを持ったのですか。  
よろしければ教えてください。<イチキョウシ』

反応があった！  
俺の感じていることに、関心を寄せてくれる人がいた。  
俺は少し嬉しく思いながら、画面の文字を追った。

「いつ頃から、か。」

最後の一つとなったから揚げを口に放り、思考をめぐらせる。  
大人に生かされている、と感じたのは、大学に入ったくらいだと思う。  
義務教育課程の頃は、毎日学校へ行き、それなりに勉強もしていて、  
友人も多かったはずだ。多少の不満はあっただろうが、  
自分の中で、受け入れることが出来たし、まだ、子どもだから、

大人の言うとおりにしよう、と思っていた気がする。

『イチキョウシ>そうですね。大学に入ってからだと思います。<シガ』

俺は短く返答し、空になった弁当の容器をゴミ箱に捨てに行き、  
ジャージのポケットを確認しベランダへと向かった。

ポケットから取り出した、煙草に火をつけ、ゆっくりと吸い込んだ。

初めて煙草を吸った際に、物凄い不快感を覚えたが、今では、その煙が心地良く感じる。

煙草を吸っている間は、余計なことを考えずに済む、そう感じる。

夜になると、裏の田んぼから虫の鳴声が聞こえ、いい感じに月が見える。

駐車場まで降りて、月を眺めながら、一人で缶ビールを飲んだこともあった。

友人と飲む酒と、違った良さがあった。一人で飲む酒は、決して楽しい気分にはならないからだ。

酒を飲むことで、自分との対話ができるように思う。

自分の本音を引き出したのも、一人で酒を飲んでいたときだった。

また、酒、煙草を覚えてから、より一層、自分と大人の距離を感じたものだ。

同じ成人でありながら、社会人は大人。学生は子どもである、と。

煙草を半分ほど吸い、消火を確認して、部屋に戻ると、  
早速、返答が来ていた。

『シガ>大学生からですか。シガサンは中学生や高校生の中にも、

今のシガさんと、同じような考えを持つ生徒がいると思われませんか。<イチキョウシ』

質問ばかりで、少し面倒になったが、大人と話し合う機会はそう多くはないので、  
俺は、話を続けることにした。

『イチキョウシ>多分ですが、いるのではないかと思っています。

顕在化していないだけで、不満を抱えているけれど、

表に出さない生徒はいるかも知れません。<シガ』

――。

『イチキョウシ>ありがとうございます。実は、最近学校に登校しない

学生がいて、どういう考えで学校に来ないのか分からず、悩んでいました。

少しながら、学生の考えが分かったように思います。<シガ』

俺は、顔も知らない大人からの返信を確認し、

缶ビールのプルタブを持ち上げた。

4月21日(月)8:20時 ゴトウリョウイチ 教師

---

【職員室にて】

朝のホームルームが近づく。  
最近の私は、教室に入ると、  
教室の後ろから二列目、窓際の席を最初に見る。  
須田の席だ。今日も来ていないだろう。  
そろそろ、彼の両親とも話し合う必要がある。  
都合がつく日はあるだろうか。

私は、煙草に火をつけた。

昨日インターネットで話した彼は、  
学校に、能動的に通う気が起きない。  
学校に行くのではなく、行かされていると感じる生徒がいる、  
という事を教えてくれた。  
一体どの位の生徒が、大人によって学校に行かされている、  
と思っているのだろうか。もしかしたら、学校という場が  
生徒の成長の妨げになっているかも知れないのか。

この国の教育では、18才までが義務教育。窮屈に感じ、  
行きたくなくなる生徒がいてもおかしくは無い。  
齢をとった私はそれに気付くことができなかった。  
自身の学生時代に、何の不満も無かったからだろうか。  
学校に来ない生徒は、年々増えている。  
しかし、いじめに対する報告は年々減少している。  
これまでは、いじめが原因で登校拒否に陥る、  
というのが一番多い登校拒否の理由だった。  
それが、変わってきていると感じる。

この国は登校拒否について、しっかり調査し、  
考えなければいけない時期になっている。  
教育の仕方、システムも大きく変わることになるかも知れないな。

煙草を根元まで吸い終わったところで、  
ホームルームまで数分となった。  
私は火をもみ消し、教室へ向かった。